

SF という観点から見た B.Φ.オドエフスキーのユートピア小説

久野康彦

1. ロシアの SF の歴史における B.Φ.オドエフスキーの評価

B.Л.ゴプマンが「ロシアでは SF の伝統は小説『4338 年』(1840) の作者 B.Φ.オドエフスキーの名前と結びついている」と述べ、ダルコ・スーヴィンがロシアの SF の伝統が世界的水準に近づくのを可能にしたのがオドエフスキーの『4338 年』であると語っているように¹、ロシアの SF の歴史において嚆矢とされることが多いのが、B.Φ.オドエフスキーの未完のユートピア小説『4338 年』である。しかし、同じスーヴィンによれば、ロシアの SF の系譜はさらに 15 世紀まで遡れるとされ、さらに 18 世紀にはリョーフシンやシチュエルバートフ、19 世紀前半にはウルィブリシエフやキュヘリベーケルやブルガーリンらの作品が言及されている。このように、オドエフスキー以前にも、そしてその同時代にも SF に分類することが可能な作品がなかったわけではない²。それでは、それにもかかわらず、なぜオドエフスキーの『4338 年』がしばしばロシアの SF の歴史における最初の本格的な SF とされるのだろうか？

ウラジーミル・フョードロヴィチ・オドエフスキー(1804-69)は、ロシアの国民的詩人アレクサンドル・プーシキンの同時代人で、博学多才な百科全書の知識人として知られる。彼の関心は文学、哲学、神秘思想、音楽、科学、社会活動、料理など多岐に渡り、作家としても哲学小説、諷刺小説、幻想小説、芸術家小説、社交界小説など様々な種類の作品を書き残している。そして彼が書いた作品の中でも「ユートピア小説」に分類される小説は 4 篇あり、そのうちの 1 つは若い頃に書いた『地球の生活における二日間』(1828)で、残りは作家としての成熟期に書いた『名前のない町』(1839)、『4338 年』(1840/1929)、『最後の自殺』(1844)の 3 篇である。当論文では、SF として括られることも多いオドエフスキーのこれらのユートピア小説を、SF という文学ジャンルの意味合いを考えながら、その観点から改めて分析することで、オドエフスキーのユートピア小説の SF としての独自性を明らかにしてみたい。

2. SF というジャンルをめぐる問題

しかし、オドエフスキーのユートピア小説を SF という観点から分析するというアプローチには問題がないわけでもない。それは、1 つには、SF というジャンル概念が成立していない時期の作品を SF という観点から分析することの妥当性の問題であり、もう 1 つは、SF というジャンル概念そのものの曖昧さの問題である。

現在の価値判断を遡及的に過去の事象の分析に持ち込むのは、歴史学の用語で「ホイッグ史観」³と呼ばれ、歴史学、とりわけ科学史では特に差し控えるべきアプローチであ

¹Гопман В.Л. Научная фантастика // Николокин А.Н. (сост.) Литературная энциклопедия терминов и понятий. М., 2003. С.624; Дарко・スーヴィン (大橋洋一訳)『SF の変容。ある文学ジャンルの詩学と歴史』国文社、1991 年、374-375 頁。

²論文末尾の付録「帝政ロシアの SF のリスト」を参照

³ 17 世紀の名誉革命前後のイギリスで、王党派に由来するトーリー党と並び、政治の世界における一大勢力となったホイッグ党が、党是である自由主義という観点から過去の歴史を進歩史観的に解釈したことに由来する用語。См. ハーバート・バターフィールド (越智武臣他訳)『ウィッグ史観批判：現代歴史学の反省』未来社、1967 年。

るとされる。SFの歴史を語る者たちの多くが指摘しているように、今日我々がSFと見なしているジャンルは、古くは古代ギリシアの作家ルキアノスの作品にまで遡ることができるものの、近代的な本格的SFは、19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、ジュール・ヴェルヌとH.G.ウェルズという両作家の創作によって成立したものとされる。そして最終的に「SF(サイエンス・フィクション)」という用語が登場したのが1920年代で、1926年に創刊された世界初のSF雑誌『アメージング・ストーリーズ』初代編集長ヒューゴー・ガーンズバックの命名に由来するものと言われている。すなわち、SFは、オドエフスキーがユートピア小説を書いた1820年代～40年代から後の時代に成立した概念であり、それゆえ、SFという観点からオドエフスキーのユートピア小説を分析するということは、作者自身が想定もしなかった後世の概念を適用しているという点で、まさしくこの「ホイッグ史観」的な行為にあたる。しかし、当論文では、それにもかかわらず、敢えてこのようなアプローチを行いたい。というのも、同時代の他の作家たちの創作と一線を画する、彼のユートピア小説の特異な特徴を明らかにするのに、SFという観点から考察するというアプローチは極めて有効であると考えられるからである。

一方、第2の問題点、すなわち、SFというジャンル概念そのものの曖昧さはより一層厄介な問題である。「『SF』という用語は容易な定義を拒んでいる」(アダム・ロバーツ)、「ミステリーやロマンスといった表面的に似たジャンルの場合よりもはるかに困難であり、あるいはもしかしたら、叙事詩や小説そのもののようなより広いカテゴリーの場合よりもより一層困難なのかもしれない」(カール・フリードマン)など、SFの定義を試みる者たちが異口同音に書いているように⁴、SFという語は、ごく日常的に使われている語であるにもかかわらず、すべての点において異論のない厳密な定義は難しい用語である。これは、おそらく、アシモフやアーサー・C・クラークやハインラインのような極めてシリアスなSFから、スペース・オペラなどのパルプ・フィクション的な流れ、さらには『スター・ウォーズ』や『スタートレック』のような娯楽映画やテレビ・ドラマまでに至る、SFの枠で括られるものの幅の広さが原因なのだろう。これまでの研究以上に完全なSFの定義を与えるということは非常に膨大な労力を要し、当論文の扱う範囲を完全に越えているので、ここでは、従来の研究者や批評家によるSFの定義を足掛かりにして、オドエフスキーのユートピア小説の分析に先立ち、その分析に役立つと思われる要素を抽出してみたい。そこで注目するのは、ジュール・ヴェルヌとH.G.ウェルズに端を発するシリアスなSFの流れであり、その結果、歴史的にSFという用語の元となったパルプ・フィクション的なSFはひとまず今回の論文の考察外となることは断っておく。

まず考察の出発点としたいのは、『SFの変容』におけるダルコ・スーヴィンの定義である。彼の定義は、多くのSFの研究書にしばしば引き合いに出され、いくつか批判もあるものの、SFの定義に対し始めて理論的明晰さを与えた点で高く評価されている。スーヴィンは、SFを「認識異化(cognitive estrangement)の文学」とし、「異化と認識の共存と相互作用を必要かつ十分条件とする文学ジャンルであり、その主たる形式上の技巧は、作家が経験できる環境に代わる想像的枠組み」と定義している。彼の説明によれば、「異化(estrangement)」はリアリズム文学とSFを分かち要素であり、前者が「作家の経験する環境を正確に再創造」する文学であるのに対し、後者は「異様な新しさ、《新事象》にもつぱら関心を寄せる」文学とされる。そして、スーヴィンは、この《新事象》に対する関心が「固定した規範的体系——プトレマイオスの閉じた世界像——に対し、新しい規範の体系を示唆する視点や世界観をつきつける働きがある」という点に、シクロフスキーやブレヒトの言う「異化」の機能を見だし、「サイエンス・フィクショ

⁴ Adam Roberts, *Science Fiction* (London and New York: Routledge, 2000), p.1; Carl Freedman, *Critical Theory and Science Fiction* (Honover and London: Wesleyan University Press, 2000), p.13.

ン」のうち「フィクション」の要素をそれと重ね合わせる。一方、神話と SF を区別する要素が「認識 (cognition)」であり、前者が停滞社会にある規範を絶対視し人格化する無時間的かつ宗教的な試みであるのに対し、後者は「経験できる環境からとりだせる可変的で未来志向の要素に焦点を絞り」「まず現象そのものを問題視して、次にその現象がどういふ帰結にいたるかを探ろうとする」文学である。そして、経験世界とその諸法則に基づいて可変的な未来を描く論理的な想像力をスーヴィンは「認識」と呼び、それを「サイエンス・フィクション」のうちの「サイエンス」の要素の実質的な内容であると考え。こうして、彼によれば、SF は異化的である点において神話に近く、リアリズム文学と隔たっているが、認識的である点においてリアリズム文学に近く、神話と隔たっているということになる (スーヴィンの区分をわかりやすくまとめると以下の表のようになる)⁵。

	自然主義的	異化的
認識的	「リアリズム」文学	SF (および牧歌)
非認識的	「リアリズム」文学 の下位文学	《形而上学的》; 神話、 民話、ファンタジー

「本書で認識を云々するとき、この語に現実の^{リフレクション}反映のみならず、現実に関する^{リフレクション}考察という意味も含ませている。この語には作者の環境を静的に鏡像としてさしだすだけではなく動的な変容をもめざす創造的探求の意味もこめられている⁶と述べているように、スーヴィンが「認識」という語を用いるとき、問題にしているのは、同時代の科学に関する知識の有無や量ではなく、科学の基礎をなす、論理的な手順を踏んで考察を展開する思考の方法論であることはここで強調しておきたい。このような思考の方法論は極めて近代的なものであり、ヴェルヌやウェルズのようなタイプの SF が成立した背景にはそのような思考方法の存在が不可欠であったと考えるのが私の立場である。

しかし、他方では、スーヴィンがユートピア小説と SF のジャンルの差異を明確にしていなかった点は問題にしたい。スーヴィンがロシアの SF を扱った章で挙げているものには、15 世紀の『インド王国の物語』からラジーシチェフの『モスクワからペテルブルクへの旅』やチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』におけるユートピア的ヴィジョンに至るまで、SF というよりはユートピアのジャンルに分類するのがふさわしい作品が多数含まれている。ここで彼は、厳密に言えば、ロシアの SF の歴史を記述するというよりは、ユートピア小説の歴史の中に SF の源流をたどることを目指しており、それゆえ、SF とユートピア小説をあまり区別していないのだろう (彼が提唱した SF の定義、とりわけその「認識」の側面を厳格に適用すると、『SF の変容』における革命前のロシアの SF のリストはかなり貧しくなるだろう)。しかし、SF という観点からオドエフスキーのユートピア小説を考察するという当論文の問題設定ゆえに、ユートピア小説と SF は隣接した文学ジャンルであるにせよ、同時に質的に異なったジャンルであるということを確認しておく必要がある。それゆえ、ここで SF とユートピア小説の差異を考察しておきたい。

ユートピア小説における架空社会は原則として作者の同時代の社会の鏡であり、その裏返しの鏡像のうちには作者は自己の政治観や現実の社会に対する批判を表現してゆく。ユートピア小説で重要なのはまずこのような作者の思想や批判であり、それゆえ、物語の中の架空社会は、しばしば現実の社会の反面教師的な、モデル化された静的な社会として描かれる。それに対し、SF では、作者の思想や批判よりも、(最終的にそのような

⁵ 以上、スーヴィン『SF の変容』37-51 頁を参照。

⁶ スーヴィン『SF の変容』、45 頁。

作者の思想や批判が表現されることがあるにしても）まず作者の同時代の現実の経験や知識を土台にして未来社会を描いてゆくその想像のプロセスそのものが重要なのである。そして、同時代の科学の知識や発想を出発点としながらも、想像世界の中でその潜在的可能性をいかに奇想天外に発展させてゆくかというところに SF の面白さがある。すなわち、ユートピア小説が、作者の思想の表現や批判の対象として都合が良いようにモデル化された静的な社会を扱う文学ジャンルであるとするならば、SF は、新奇な科学技術的発想の実現によって社会が変化してゆく動的過程に注目する文学ジャンルであると言えるだろう。⁷

ユートピア小説	結果に注目	静的	作者の政治観・道徳観を理想社会という枠組みの中で展開・説明。科学技術の成果は理想社会を実現させる口実にすぎない。
SF	プロセスに注目	動的	新奇な科学技術的発想の実現が社会や人間に与える影響をロジカルに考え小説として描く。作者の政治観・道徳観の主張が主目的ではない。

さらにユートピア小説と SF が違いを見せるのは、人間に対する捉え方である。ユートピア小説では、作者の同時代の人間に近いにせよ隔たっているにせよ、いずれにせよ、人間も、モデル化された静的な社会に対応し、物語世界内では変化のない静的な存在として描かれることが多い。それに対し、世界が変化しうる潜在的可能性を物語化する SF では、人間も同じく変化する存在として描かれる。20 世紀のイギリスの SF 作家ブライアン・オールディスによる次のような SF の定義は、そのような人間のあり方に対する問いが SF の重要な要素であることを示している。

サイエンス・フィクションとは、人間と、宇宙におけるそのありかたに対する定義——現代の進歩した、だが混乱した知識の状態（科学）のなかでも変質しない定義——を追求するものであり、特徴としては、ゴシック、あるいはポスト＝ゴシック小説の形式を継ぐものである。⁸

現在の社会が科学技術の驚異的な成果によってある方向に変化するならば、人間の何が変わり、何が変わらないのか——「人間と、宇宙におけるそのありかたに対する定義」という問題は、ジュース・ヴェルヌや H.G.ヴェルズを祖とするその後のシリアスな SF の流れにおいて、重要な要素の 1 つであったと言えるだろう。

こうして SF という観点からオドエフスキーのユートピア小説を考察する際、SF というジャンルにおいて重要と思われる要素から特に私が注目したい要素は次のようになる。

⁷ ジャン・ガッテニョも同様の指摘をしている。「この発展という語こそ、おそらく問題の鍵となってくれよう。社会が固定されているものと思われているかぎり、理想を描く文学に想いえがけるのは、別の社会でしかない。社会のある型から別の型への移行を想いえがくことはできない。言葉をかえれば、ユートピア的（あるいはラブレールが鐘鳴島でみせたような風刺的）絵画描写は推論による外挿であって、潜在的発展の（たとえ誤ったものにせよ）意識ではない、（中略）サイエンス・フィクションの創始者たちは、この領域で、ダーヴィン進化論の衝撃と発展の概念との恩恵を受けている。社会も、人間そのものも、変わるべきさだめだというわけだ。だからその発展の意味を予見しようとするのは当然だ。」（傍点は著者）〔ジャン・ガッテニョ（小林茂訳）『SF 小説』白水社、1971 年、49-50 頁〕

⁸ ブライアン・オールディス（浅倉久志・酒匂真理子・小隅黎・深町真理子訳）『十億年の宴』東京創元社、1980 年、12 頁。

1. 「認識」という機能と、その機能を背後で支えるある近代的な思考様式が存在
2. 静的な社会を描くのではなく、社会が変化してゆく動的過程に注目するという姿勢
3. 人間と、宇宙におけるそのあり方を問うという問題意識

以下、このような点に注目しながら、オドエフスキーのユートピア小説を考察してみたい。

3. 「合理主義者」としての B.Φ.オドエフスキー

19世紀前半のロシアの文学や思想において、B.Φ.オドエフスキーはロシアのロマン主義の代表者の一人とされ、ドイツの作家 E.T.A.ホフマンの文学や哲学者シェリングの思想のロシアにおける翻案者と見なされることも多い。しかし、確かにオドエフスキーに対するドイツ・ロマン主義の影響は否定しがたいにもかかわらず、彼の文学や思想がすべてドイツ・ロマン主義のそれと重なり合うわけではない。その中でも両者が大きな違いを見せるのは、同時代の自然科学に対する姿勢である。

オドエフスキーは、生涯に渡って、同時代の自然科学に対し強い関心と深い知識を持っていた。1830年代彼は化学の勉強に熱中し、その成果が1833年に雑誌『万人に有益な情報の雑誌』に掲載された論文『化学概論』と、1835年に執筆された『化学の発見と観察の歴史的概観の試み』となる。1836年には、ロシアにおける鉄道敷設の必要性を説いた M.C.ヴォルコフの論文をプーシキンに紹介し、1843年には、科学技術に関する啓蒙的文集『村の読み物』を A.Π.ザブロツキー＝デシャトフスキーと共同で刊行している。さらに、作家としての活動を停止した後の晩年の1860年代においても、1860年に『サント・ペテルブルグ通報』に『全面的木煉瓦舗道に代わる木煉瓦レール』と『ヴォルガ・ドン鉄道に関してさらに数言』という論文を寄稿し、1868年には、電気現象の研究と応用に関して触れた小冊子『リュビーモフ教授の公開講義』を世に出すなど、死ぬまで科学に対する関心を失うことがなかった。とはいえ、同時代の自然科学に対しては、ドイツ・ロマン主義の担い手たちも強い関心を寄せていなかったわけではない。鉱山技師で鉱物学や地質学に造詣が深かったノヴァーリスや、ライプツィヒ大学で当時の最先端の自然科学（生物学や化学や物理学など）に接し、その知見を自らの自然哲学に生かしたシェリングの他にも、G.H.シューベルト、リッター、バーダー、カールスらの自然に関する論考にも同時代の自然科学に関する知識が積極的に取り入れられているのを見ることができる。しかし、両者が異なるのは、ドイツのロマン主義者たちが自然科学を自然の背後にある神秘を理解するための重要な手段と考えたのに対し、オドエフスキーは、自然科学を、実地における応用、すなわち技術と結びつく場合において重要な意味を持つとしばしば考えた点にある。彼が書きたいいくつかの科学関連の論文のタイトルからも判断できるように、彼は自然科学の実用面に強い関心を向け、電気や鉄道などの技術を現場で実際にどう改良してゆくかという非哲学的な問題にも精力を費やすのを厭わなかった。

このような同時代の自然科学に対するオドエフスキーの実際的な姿勢は、元をたどれば、彼の自然観に由来する。ドイツのロマン主義者たちは、ノヴァーリスの鉱物幻想やシェリングの壮大な自然哲学のように、自然を哲学的思弁の対象とし、しばしばその中にある種の神秘の世界を見いだそうとする傾向があった。そして、彼らの自然観の最大の特徴は「生ける自然」であり、それ以前の機械論的自然観と一線を画する有機体的自然という概念だった。しかし、それに対し、オドエフスキーは自然を極めて醒めた目で即物的に捉えていた、彼の思想には、ドイツ・ロマン主義者たちにあるような「生ける自然」という発想は全くなく、逆に見られるのはそれとは全く正反対の、自然は生を持たないという考え方である。「自然には意志 (воля) がない。自然は、永遠に変わらぬ必然性の産物だ。植物は数千年前も、今日と同じように咲いていたのだ」(『ロシアの夜』)

9. 彼の自然観のこのような特徴は、一見 17・18 世紀的な機械論的自然観に近いと言えるかもしれない。だが、実のところ、それと全くの同一というわけでもない。彼はシェリングの哲学から強い影響を受けた人物であり、ドイツ・ロマン主義に特有の「有機体」という発想も彼の思想の中には見られる。ただ独特なのは、彼が「有機体」という概念を、ドイツ・ロマン主義者たちのように自然に対してではなく、人間に対して適用している点である。「君は、自然の産物を、人間の暗く冷たく無力な領域と比べているから、自然にまで成り下がった人間に自然が勝つと言うことになるのさ。けれども、どんな自然の産物が人間の魂という明るい、赤々と燃える炉の産物まで達し得るというのかね。人間の精神は、自然と同じ根源に基づいて、自然の中にある現象と同じような現象を作り出す。だが、それを、自発的に、無条件に行うのだ」(『ロシアの夜』)¹⁰ このように彼にとっての自然の単純さは、人間の精神の複雑さと対比された上で語られているのは、17・18 世紀的な機械論的自然観とも異なる点である。

人間は複雑だが自然は理解しやすいと考えるオドエフスキーのこうした自然観は、一方では、自然科学をポエジーや宗教のレベルまで持ち上げてしまうことなく、自然科学の実用的応用性といういささか世俗的な問題に対して関心を持つことを可能にした。19 世紀の未来予測小説は産業革命と密接に結びついており、オドエフスキーが未来予測小説を書いたのも、技術の実用に対するこのような世俗的な関心の延長線上にあったと言えるだろう。そして、他方では、オドエフスキーのこのような自然観は、自然を神秘的にではなく分析的に把握することを促した。分析への志向はオドエフスキーの物の考え方の重要な要素をなしており、特にそれが顕著に現れているのは、彼の E.T.A. ホフマン論である。彼のホフマン論は極めて異色である。というのも、それは、通常ホフマンの特徴とされる幻想性に注目するだけではなく、一見それと相反するような分析的な側面の存在を同時に指摘し賞賛しているからである。

ホフマンは特別なタイプの不思議なものを発明した。分析と疑いの時代である現代では、不思議なものを口にするのはかなり危険なことである。しかし、それでも、この要素は今も芸術の中に存在している。(中略) ホフマンは、現代においてこの要素を言語芸術に入れる助けとなる唯一の糸を発見した。彼の不思議なものはいつも 2 つの側面を持っている。一つは純粋に幻想的な側面であり、もう一つは現実的な側面である。だから 19 世紀の自尊心の強い読者は、自分に語られる不思議な出来事 unconditional に信じなければならないことを強制されない。小説の舞台には、まさにその出来事を極めて簡単に説明しうるものがすべて書き込まれるのである。こうして、狼も満腹、羊も無傷、となる。不思議なものに対する人間の自然な嗜好は満たされ、同時に、熱烈な分析的精神も侮辱されないのである。この 2 つの対立する要素を和解させることは真の天才の技である。(『「ロシアの夜」への注釈』)¹¹ [傍点は論者]

こうした文章から導き出されるオドエフスキー像は、文学史上の一般的な評価に反して、「ロマン主義者」というよりは「合理主義者」である。オドエフスキーは、幻想小説を執筆し、神秘思想に関心を持つ人物として知られているにもかかわらず、彼自身は決して神秘主義者ではないというのが私のオドエフスキー理解である。彼は、神秘に強い関心を持つものの、常に神秘に対しては冷静で分析的な知性をもって接する人物であり、その点、現代で言えば『オカルト』などの著作で知られるコリン・ウィルソンに似てい

⁹ Одоевский В.Ф. Русские ночи. Л., 1975. С.142.

¹⁰ Одоевский. Русские ночи. С.98. オドエフスキーにおける自然と人間の概念をめぐる問題については、拙稿「自然と人間の闘争 ～「自然」概念をめぐる В.Ф.オドエフスキーのシェリング受容について～」(『SLAVISTIKA』(東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報)、第 12 号、1996、pp.18-33.) を参照。

¹¹ Одоевский В.Ф. Примечание к «Русским ночам» // Одоевский В.Ф. Русские ночи. Л., 1975. С.189.

るとも言えるだろう。『伯爵夫人 E.P.P.宛の手紙。幽霊、迷信的恐怖、錯覚、魔術、カバラ学、錬金術、その他神秘学について』(1839)は、オドエフスキーのこのような合理主義者としての側面を最もよく示している作品である。友人の女流作家ロスタプチナーに宛てた書簡という形をとるこの作品は、「私はこれらの不思議な現象をすべて説明し、自然の一般法則の下に置き、迷信的恐怖の根絶を促したいのです。」¹²と著者自身が明言しているように、超自然現象に徹底的に合理的な解釈を施している点で「合理主義者」オドエフスキーの真骨頂を發揮したものである。例えば、「第1信」で、深夜書齋で耳にした幽霊じみた奇妙な物音の原因を著者が推論する場面を見てみよう。

この目に見えない音に注意深く耳を傾け、自分の沈着さを総動員してそれに助けを求めると、私は、ある足音と次の足音の間隔の中に何か規則正しいものがあるのに気づきました。幽霊は、あるリズムに従うように、次の足音よりも早く足音を鳴らさないのです。始め私は、これは時計の振り子の音の反響が原因だと思いました。しかし、これはありえないことがすぐにわかりました。なぜなら、時計は私から数部屋離れたところにあったからです。注意深く書齋を調べているうちに、しまいには私は開かれた窓に近づきました。するとすぐに同じ音を、けれどもはるかに強い音を耳にしたのです。謎は極めて簡単に説明できました。私の窓の向かいにあるフォンタンカ川には、薪を積んだ舢舨が浮かんでいました。水の上にある舢舨の下部から、普通このような舢舨に流れ込む水が注ぎ出していたのです。この水しぶきによって生じた音は、町の喧噪の中では聞こえません。けれども、強い音なので、4階の開かれた窓に入ると、部屋の特別な音響構造のせいで、部屋のまさにある隅では反響し、またある隅ではほとんど聞こえないということになるのです。私は、この種の現象を、我々の外部にあり、病的なあるいは健康な状態の我々を欺く幽霊の原因と呼びたいと思います。¹³

原因を究明する物証を探しつつ、冷静に仮説と検証を繰り返すこのような推論の手順は、さながら探偵小説において犯行現場を検証する鋭敏な探偵を思わせる。そして、ここで探偵小説における探偵の手法を想起するのは、あながち突飛な連想ではない。イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグは、『神話・寓意・徴候』において、美術研究におけるモレッリの作者鑑定法、シャーロック・ホームズの捜査方法、精神分析学におけるフロイトの方法に通底するある方法論を、19世紀末に人間科学の領域で成立した認識論的モデルとして指摘した。すなわち、それは、一見取るに足らない表面的な兆候を手掛かりに隠された真相を論理的に究明してゆく「推論的範例^{パラダイム}」という思考法である¹⁴。19世紀末に探偵小説（その代表がドイルのホームズ物である）が確立される根本的な基盤となったとギンズブルグが考えるこの「推論的範例^{パラダイム}」は、SFにも当てはめることができると私は考える。なぜならば、探偵小説が、犯罪がなされた現在から論理的な推論によって過去になされた犯罪の真相を帰納的に究明する文学ジャンルであるとするなら、SFは現在の科学の成果を元に未来社会のあり方を演繹的に推測してゆく文学ジャンルであり、その点、時間軸において正反対であるものの、両方とも同じような論理的推論に支えられた文学ジャンルであると考えられるからである。そう考えると、SFと探偵小説が共に19世紀後半に確立した文学ジャンルであるということは決して偶然の現象ではないと言えるだろう。「推論的範例^{パラダイム}」の確立とSF・探偵小説の確立は、完全にリンクした現象なのである。

¹² Одоевский В.Ф. Письма к Графине Е.П.Р... й, о привидениях, суеверных страхах, обманах чувств, магия, кабалистике, алхимии и других таинственных науках // Одоевский В.Ф. Сочинения князя В.Ф.Одоевского. Ч.3. СПб., 1844. С.308.

¹³ Одоевский. Письма к Графине Е.П.Р...й.С.312-313.

¹⁴ カルロ・ギンズブルグ(竹山博英訳)『神話・寓意・徴候』せりか書房、1988年、177-226頁。

探偵小説	帰納的	現在（犯行現場）→過去（犯罪）
SF	演繹的	現在→未来（架空世界）

そして、論理的推論を駆使して犯罪の推理を行う点で、しばしばホームズの直接の先駆者とされるオーギュスト・デュパンという形象を創造し、「探偵小説の父」と称されることも多いアメリカの作家エドガー・アラン・ポーが、同時に『ハンス・プファールの無類の冒険』のような作品によって、SFの歴史においてもその名前が言及されるのも偶然ではない。B.サハロフが指摘しているように、オドエフスキーは、実のところ、資質的にはホフマンよりはポーに近い作家であり、その分析的知性という特徴は、後のジュース・ヴェルヌやH.G.ヴェルズとの創作につながるタイプのSFを、19世紀前半という時代を書く能力を彼に授けたと言えるだろう。¹⁵

次章では、主として『4338年』を中心にオドエフスキーのユートピア小説を取り上げ、それをほぼ同時代に書かれたブルガーリンの『もっともらしい作り話、あるいは29世紀の世界をめぐる旅』（1824）〔以下『もっともらしい作り話』と略〕と比較することで、近代的なSFという観点から見たオドエフスキーの作品の独自の特徴を検討してみたい。

4. ブルガーリンの『もっともらしい作り話、あるいは29世紀の世界をめぐる旅』とオドエフスキーの『4338年』の比較

ファージェイ・ヴェネディクトヴィチ・ブルガーリン(1879-1959)は、ポーランドの小地主貴族階級の出身で、ナポレオン戦争時にはフランス軍のロシア遠征に兵士として参加したという経歴を持つにもかかわらず、その後ロシアで保守派の新聞『北方の蜜蜂』の編集長として体制側の有力な論客の一人となり、秘密警察への密告者としても当時悪名を馳せていたジャーナリスト・小説家である。作家としては、数多くのフェリエトンや諷刺コラムを執筆し、ロシア初のベストセラー小説とされる悪漢小説『イヴァン・ヴィジギン』と、ザゴスキンの作品と並んでロシアの歴史小説の嚆矢とされる『僭称者ディミトリー』や『マゼッパ』などの作品が知られる。『もっともらしい作り話』は、1824年『文学紙』誌上で発表された作品で、彼が書いた様々な作品の中でもユートピア小説のジャンルに属する作品の一つである。物語は、ある日、友人とともにペテルブルクからクロンシュタットへと小型ボートで乗り出した語り手が、強い突風にあおられて海中に投げ出されるところから始まる。気がつく、彼は2824年の世界にいることがわかる。彼は自分を助けてくれた歴史と考古学の教授に案内されて、言語、衣装、習慣、建築、交通機関など様々なものが19世紀と大きく異なる未来のシベリアを見聞し、そののち自らの希望でロシアの地に降り立つところで物語は唐突に終わっている。

一方、オドエフスキーの『4338年』は、『もっともらしい作り話』のおよそ15年後に一部が発表された未完の小説である。1840年の文集『朝焼け』に『4338年。ペテルブルグ書簡』というタイトルで一部が発表されるものの、最終的な形が世に出るのは実に80年以上もの後の1920年代になってのことであった。これは、1929年のO.ツェフノヴィツェル編によるオドエフスキー作品集においてであり、このバージョンには本編に加え、本編に関連したアイデアを記したヴァリエントの断片も付されている。『4338年』は未完の作品であり、もし作品が完成されていれば盛り込まれたかもしれないアイデアが示唆されているという点で、ここでは積極的にヴァリエントも『4338年』の考察の対象とする。物語は、ある匿名の人物がヴェラ彗星が地球に衝突するとされる4339年の世界に関心を持ち、動物磁気による催眠状態のうちに未来社会の情景を書き取ったテキストをその友人が紹介するという設定になっている。そして、その冒頭の解題に続いて

¹⁵ См. Сахаров В.И. Гофман и Одоевский // Художественный мир Гофмана. М., 1982. С.173-184.

紹介されているテキストは、4338年の未来社会においてロシア旅行を友人に報告するペキン大学の学生イポリット・ツィンギエフの何通かの書簡である。電動列車と電動気球を乗り継いで4338年のロシアに到着したツィンギエフは、未来の世界では「世界の中心」となっているロシアの都市の壮麗さや科学技術の成果（温暖な気候を維持する熱供給システム、磁気電信装置、人工太陽など）を驚きと共に友人に書き送る。しかし、一年後に彗星が地球に衝突するという事実に対し、一見楽天的なロシア人たちは、実は、密かな不安にも襲われているようでもあった。当地の学者ハルチンに案内されて、博物館や上流社会や学術会議などを見聞したのち、ツィンギエフが学者もどきの下層民たちの騒ぎを目撃するところで物語は未完に終わっている。

15年ほど間隔を置かれて発表されたこの2作品は、お互い資質の違う作家の作品であるにもかかわらず、多くの類似した特徴を持っている。まず第1に、両作品のタイトルは、18世紀のフランスの作家ルイ＝セバスチヤン・メルシエのユートピア小説『西暦2440年』（1771）の影響を窺わせる。そして内容面でも、どちらの作品も、時間的に遠く隔たった未来を小説の舞台とし、語り手の印象を伝える形で様々な未来予測を展開している点で、ルイ15世時代の男が西暦2440年のパリに迷い込んだという設定のメルシエの作品と似ている。第2に、どちらの作家においても未来予測のうち大きな割合を占めているのが、科学技術の奇抜な成果の列挙であり、そのうちのいくつかは現代で実現している。第3に、両者に共通して見られるのは、語り手が見聞する女性の衣装や博物館の描写に強く感じられる同時代のロシア社会に対する諷刺的要素である。そして、最後に、両者の作品とも、未来社会の社会制度が保守的であり、貴族や平民といった19世紀の帝政ロシアの階級構造がそのまま温存されている点も共通点として挙げられるだろう。

しかし、未来予測小説という点でこのように類似した特徴が多いにもかかわらず、そのような未来予測を実現させる方法論という側面に目を向けると、そこには2人の作家の本質的な違いも見出すことができる。ブルガーリンの『もっともらしい作り話』は、簡単に言えば、ジャーナリストが書いたユートピア小説であり、ジャーナリストとしての関心と志向が反映した作品である。「自然科学において我々が古代人たちをはるかに凌駕しているのは確かだ。だから発見が、今と同じくらい多く、今と同じくらいの熱意を込めて絶えることなく続くならば、1000年後人類に何が起こっているか知りたいものだ」という冒頭の語り手の言葉¹⁶は、読者の注意を引く新奇なニュースを探し求める敏腕編集者としての嗅覚を示すセリフであり、実際、物語は29世紀の未来社会の奇妙な事物や風習を、諷刺を交えて面白おかしく列挙してゆくということに重点が置かれる。

その際、ブルガーリンにとって未来予測の根本的な方法論となっているのは、比較的単純な類推と入れ替えの原理である。すなわち、それは、Aという現象が現在あるから、未来にはA'という現象が起きるだろうという発想であり、あるいは、現在のAとBという関係が、未来には逆転してBとAになるという考え方である。現在のAという現象が未来にはBという現象になって、さらにCという現象に発展してゆくという複雑な展開は、ブルガーリンの未来予測には見られない。こうして、例えば、古代ローマ時代のスラブ地域とブルガーリンの同時代のロシアという対比は、そのまま同時代の未開のシベリアと未来の文明化されたシベリアという対比に延長される。すなわち、古代ローマ時代には未開の地であった場所に現在文明化されたロシアがあるというならば、現在未開の地であるシベリアが29世紀の未来では文明化された地になっていてもおかしくはない、という理屈である。あるいは、初期の船の操縦装置は魚や両生類を模倣していたということから、未来の気球は鳥を模倣すると考え、あるいは、同時代のロシアにおける、上流社会の言語としてのフランス語と卑俗な言語としてのロシア語という対比が、

¹⁶Булгарин Ф.В. Правдоподобные небылицы, или Странствование по свету в двадцать девятом веке // Медведев Ю.М. (сост.) Косморама: фантастические повести первой половине XIX века (Библиотека русской фантастики, Т.6). М., 1997. С.317.

未来のロシアでは、上流社会の言語としてのアラビア語とロシア語が詩を書くときのみ
に使う言語としてのロシア語という対比になる、という具合である。

ブルガーリンの『もっともらしい作り話』における未来予測の方法論がこのように単
純なのは、結局のところ、ブルガーリンの未来予測小説の目的が、科学の知識と発想に
基づいた未来予測そのものにあるのではなく、未来予測に名を借りた同時代の現実の諷
刺にあるからである。それゆえ、未来社会において科学の新奇な成果が描かれ、その原
理の説明が加えられることがあったとしても、どこかそれは表面的な説明という印象を
受ける。例えば、「詩を作る機械と散文を作る機械」の描写を見てみよう。

これは詩を作る機械と散文を作る機械だった。私のいる前で何度か実際に動かしてみせてくれた。
だから私は、一目見てわかり得た範囲で、このメカニズムを読者諸君に説明してみようと思う。

私の案内人は、ドミノ遊びに使うような小さな四角の骨が中に入っている箱を引っ張り出した。その
骨には様々な単語が書かれていた。彼はいくつかの単語を、下にキーがついている箱に無作為に手のひ
らで投げ込んだ。それから彼はチェス盤で韻を調整し、機械を動かした。すると詩作が始まったのであ
る！ シリンダーに締めつけられた鍛造用のふいごが単語の入った箱に吹きつけ、単語は風の作用を受
けてがちゃがちゃと音を立てながら、拍子をとって、音楽に合わせてチェス盤を跳びはねた。30分後、
機械が停止すると、私は、すべての言葉があるべきところに収まり、詩の韻律や調和、豊かな押韻があ
る詩を読むことができた。要するに、そこには健全な考えと目的以外のすべてがあったのだ。それは、
韻を吟味する情熱を靈感と見なし、友人たちの称賛を長所と見なしている我々の時代の詩人たちの詩と
まったく同じであった。¹⁷

「詩を作る機械と散文を作る機械」のメカニズムの詳細な描写にもかかわらず、こ
こに現れている著者の関心は、末尾の一文が示しているように、明らかに同時代の詩人
に対する諷刺にあることがわかる。結局のところ、ブルガーリンが、新聞『北方の蜜蜂』
と小説『イヴァン・ヴィイジギン』で多くの読者を獲得し販売部数という点で成功を収
めたのは、話題の多様性、諷刺、モード紹介、エキゾチズムといった比較的低いレベ
ルの読者をも引きつける要素を、彼が新聞や小説に巧みに盛り込んだからであった。ユ
ートピア小説『もっともらしい作り話』もこのようなブルガーリンのジャーナリストと
しての関心と活動の延長線上にある作品である。やはり重要なのは、話題の多様性、諷刺、
モード紹介、エキゾチズムという要素であり、それゆえ、ブルガーリンにとっては、お
そらく、29世紀の未来社会ではなく南海の孤島や人跡未踏の大陸の奥地を舞台にしても、
物語のあり方はさほど変わりはないであろう。

そして、ブルガーリンの描く未来社会は、作者の同時代の現実と大きく異なる事物や
風俗を数多く描いているにもかかわらず、同時代の現実を表裏逆にしただけのシンプ
ルな鏡像であり、その点本質的に静的なものである。主人公は、エキゾチックな観光地を
旅する観光客のごとく、その静的な未来社会の、19世紀のロシア人にとって新奇な事物
や風俗を見聞することに終始し、その事物や風俗の背後にある社会のあり方に注意を向
けることは全くない。そして、社会のあり方に関心がない以上、それがこの先どのよう
に変わってゆくかという問題意識もそもそも出てくるわけがないのである。さらに静的
な社会に対応して、人間もまた静的である。物質的な環境は大きく異なっているにもか
かわらず、2824年の人間は1824年の人間と本質的な違いはない。2824年の人間は1824
年の人間と同じく流行に敏感で虚栄心が強く、2824年の人間は基本的に1824年のロシ
ア人に未来の衣装を着せただけに留まっている。

こうして SF という観点からブルガーリンの『もっともらしい作り話』を見てゆくな
らば、SF としては極めて不十分な作品であるということになるかもしれない。しかし、
この場合、そのような評価は不当である。なぜならば、『もっともらしい作り話』は SF
としての側面に価値がある作品ではないからである。この作品を正当に評価するには、
ユートピア小説や大衆の読み物や諷刺としての側面に目を向けるべきであろう。ここで

¹⁷ *Булгарин Правдоподобные небылицы. С.348-349.*

『もっともらしい作り話』を取り上げたのは、SFとして価値が低いということを言いたいからではなく、時代的にオドエフスキーの『4338年』の比較対象として極めて好適な作品であるからである。

それではオドエフスキーの『4338年』を見てみよう。この作品における未来予測は、『もっともらしい作り話』と異なり、方法論的な一貫性と予測の射程の奥行きを特徴とする。方法論に対する強い意識は、冒頭に描かれるユートピア小説に通例の別世界への移行の描写の中にすでに現れている。ブルガーリンの『もっともらしい作り話』では、別世界への移行は、ボートの転覆という偶発的な事故によって実現されており、移行の手段の科学的原理の説明は一切記述されていない。それに対し、オドエフスキーの『4338年』では、匿名の人物は、彼が「科学的」と考える方法によって、すなわち動物物磁気催眠による睡眠状態を通じて未来社会を幻視する。ここで重要なのは、動物磁気催眠が今日的観点からは科学的とは見なされないということではない。注目すべきは、同時代の科学の知識を活用しながら別世界への移行に合理的という印象を与える説明を行おうとする思考の方向性である。このような物の考え方は、未来の中国人学生ツィンギエフの書簡をめぐる冒頭の解題の中で、マニフェスト的に提示されている。

しかしながら、わが中国人の話や、現在我々が知っている様々な状況から考えてみると、彼が多くの点で間違っているといえる、とは言えない。第一に、人間はいつも人間のままであり、開闢以来それは変わらない。同じ情熱、同じ衝動がすべて残っているのだ。他方、人間の思考や感情の形態、とりわけ人間の物理的な生活様式は、著しく変わっているに違いない（中略）

化学の現在の成功は、弾性ガラスの発明を予測することを可能にした。現在の我々の産業はそれがないことを痛感し、またかつてネロがそれを思い浮かべたことを歴史家の誰一人として疑うものはいない。現在の医学におけるガスの使用も、いつかは日常的に使われるものになるにちがいない。かつてただ葉の形でしか使われなかった胡椒やバニラやアルコールやコーヒーやタバコと同じように。気球については言うまでもない。もし今蒸気機械がわれわれの目の前で、重りをたまたま載せたやかんから現在の状態まで達したというならば、もしかしたら19世紀がまだ終わらないうちに、気球はみんなが使うものになり、社会生活の形態を、蒸気機械や鉄道が変えたよりも千倍大きく変えるであろうということはどうして疑うことができるだろうか。「要するに」と私の友人は続けた。「わが中国人の話の中には、その存在が自然と芸術の世界における人間の力の発達の一般的法則から自然に導き出しえないものは何もないと思う。従って、誇張だといって私の空想を過度に非難するのは間違っている。¹⁸

過去の「重りをたまたま載せたやかん」が現在の「蒸気機関」となったならば、現在の「気球」は未来に「みんなが使うものになる」だろうという考え方は、一見したところ、ブルガーリンと同じような単純な類推と入れ替えの原理に基づいているように思えるかもしれない。しかし、両者の違いは、ブルガーリンにとって、諷刺が主目的で未来予測はそれを実現する手段にすぎないのに対し、オドエフスキーにとっては、未来予測そのものが主目的となっている点である。それゆえ、未来予測の方法論に関しては、オドエフスキーの方がよりシステマティックであり、自覚的である。その方法論は、上記の引用の言葉を借りれば「自然と芸術の世界における人間の力の発達の一般的法則から自然に導き出す」という手法であり、ある前提から具体的な内容を論理的に推論してゆくという点で演繹的な推論的思考法と呼ぶことができる。この手法による未来予測は、オドエフスキーの書いた別の2つのユートピア小説、『名前のない町』と『最後の自殺』でも使われている。『名前のない町』ではジェレミ・ベンサム功利主義、『最後の自殺』ではトマス・ロバート・マルサスの人口理論というイギリス人の経済学者たちの理論を元に、その理論通りに動く未来社会が実現したらどうなるかを具体的に描いており、ある経済理論を土台に具体的な未来社会の状況を推論している点で、やはりそこに演繹的な推論的思考法を見ることができる。

¹⁸ Одоевский В. Ф. 4338-й год // Одоевский В. Ф. Романтические повести. Л., 1929 (Reprint: Oxford 1975), С.347-350.

そして、『4338年』の冒頭で語られている未来予測の方法論でさらに注目すべき点は、その未来予測が、「弾性ガラス」や「ガス」や「気球」といった未来の事物の描写に留まらず、それが社会をどう変化させてゆくかというところにまで及んでいるという点である。このような問題意識は、上記の本編の引用でも「19世紀がまだ終わらないうちに、気球はみんなが使うものになり、社会生活の形態を、蒸気機械や鉄道が変えたよりも千倍大きく変えるであろう」とはっきりと語られているが、さらに明確に提示されているのはヴァリエントにおける記述である。例えば、気球を扱った文章を見てみよう。

気球とその影響

いわゆる生活環境というものはみな、一定の空間、すなわち平面においてのみ成り立つのは非常に注目すべきことである。だから、商業、産業、居住などの環境はみな空中においては全く別のものとなるだろう。それゆえ、現在の生活環境がこのまま続くのかということは、ひとえに、誰か無名の機械技師が今取り組んでいる何らかの車輪に、気球の操作を可能にする車輪にかかっている。いつ人間の生活が空中で営まれるのか、商業、婚姻、国境、家庭生活、法、犯罪の追及など、つまりあらゆる社会制度がいかなる形態をとるのかということを知るのは興味深いことである。

注目すべきは、気球や機関車などあらゆる種類の機械は、それが実現することでもたらされる直接の利益とは関係なく、それが出現することそのものによって人間の教化に影響を与えるということだ。というのも、生産者と職人に求められているのは、第一に、予備的知識であり、第二に、シャベルやくず鉄を扱うには全く必要ない理解を行う頭の体操であるからである。(ヴァリエント)¹⁹

ブルガーリンの『もっともらしい作り話』においても気球は登場するが、そこでは気球は単なるエキゾチックな乗り物にしかすぎなかった。『4338年』の本編でも、気球は同様にエキゾチックな乗り物としてしか描かれていない。しかし、ヴァリエントの記述が示しているのは、オドエフスキーには、気球が日常的な事物になると社会はどう変わってゆくかという問題意識もあったということである。同様に、ユートピア小説の定番のモチーフの1つである「月旅行」も、オドエフスキーにおいては、極めて独特な形で扱われる。彼が関心を持つのは、他の作家たちが目を向ける月旅行のプロセスでも月世界の奇妙な風物でもなく、月旅行が実現した暁には地球の生活はどうかという問題である。

月へゆく交通手段が見つかった。月は、無人の地であり、ただ様々な生活の必需品を地球に供給する源となるにすぎない。こうして、膨大な人口のせいで地球に迫りつつある破滅を避けるのである。この探検は極めて危険である。世界を一周する昔の探検よりも危険である。この探検にはただ軍隊だけが使われる。旅人たちは、月にはない空気を調合するために様々なガスを身につける。²⁰

このように見てゆくと、『4338年』でオドエフスキーは、科学の発達の成果が生み出した未来社会をひたすら楽天的に描いているだけで、同時代の現実と異なる社会や人間のあり方を想像することもできないという、次のようなスーヴィンの否定的な指摘は間違っていることがわかるだろう。

むろん、この裕福で博学な奇人、アマチュア科学者にして哲学者にして文学者であるこの男は、たしかに、その出生と才能にふさわしく、啓蒙化された貴族制の帝国を思い描く以上のことはしていない。こと人間の本性にかぎれば、それは彼にとっては、変化などうかつけぬものだった。だから社会関係を思い描くさいにも、彼は当時と同じ社会関係をただ拡大するしかない。(中略)〈デカプリスト〉サークルの政治学や倫理に反対する立場をとるオドエフスキーにとって、新たなるものとは、科学の発達の成果から生みだされるものであり、この点に関しては彼は実に楽観的なのである。(中略)したがってオドエフスキーの『西暦四三三八年』は、〈デカプリスト〉とブルガーリンの中間に位置するとみていいだろう。その作品は、科学的な外挿により未来を描いた点では先駆的だけれども、根本的に異なる新しい生産様式には根本的に異なる新しい社会関係が必要であることを最後まで見抜けなかった点で失敗

¹⁹ *Одоевский. 4338-й год. С.385.*

²⁰ *Одоевский. 4338-й год. С.386.*

作なのである。²¹

『4338年』がこのように読み手を迷わせてしまうのは、それが、未完の小説ゆえ、ユートピア小説、オーソドックスな未来予測、諷刺、警告小説（ディストピア）の要素が未整理のまま混在してしまっているからである。確かにスーヴィンが述べるような要素が『4338年』にないわけではない。しかし、ヴァリエントも含め『4338年』のテキストを注意深く読めば、『4338年』における最も重要な側面は、レヴィツキーが主張するように、「警告小説」または「ディストピア」としての側面であるということが言えるだろう²²。一見科学の成果を享受しているかのように見える4338年の未来社会は、実は1年後の彗星の衝突によって消滅させられる危機にさらされており、未来社会のすべての人々が科学の力によってそれを完全に解決できると確信しているわけではない。『『実のところ』とある男が言った。『私は彗星が怖くないふりをしようとしているけれども、彗星が近づいてくるのが大層恐ろしいのだ。』』²³ 他方では、電動列車や熱の送風機といった科学の成果の力が及ばないところに、荒れ狂う海や激しい吹雪といった自然の脅威が立ち現れている。「実際、隕石がもう数サージェン離れたところに落ちていたならば、トンネルはきっと穴が開き、怒り狂った海が、人間の大胆不敵さに復讐していたことだろう。」²⁴ このように『4338年』では、未来社会の表面的には楽天的に見える気分、自然の脅威と人間たちの不安が水を差していることを忘れてはならない。

そして、「人間はいつも人間のままであり、開闢以来それは変わらない。同じ情熱、同じ衝動がすべて残っている」という本編の冒頭の解題の文句にもかかわらず、『4338年』におけるオドエフスキーの未来予測の射程は、社会の変化だけではなく人間の変化まで及んでいた。そのような人間の変化というテーマがオドエフスキーの問題意識にあったことが明確に現れているのが、次のような『4338年』のヴァリエントの記述である。

ペテルブルグ書簡（2000年後）において。人類の生来の肉体は、知能の発達が要求する働きを満たし得ないという認識に達する。つまり、知的活動が作り出し考えついた目的と比較すると、人間のとる手段はその目的にはふさわしくないと考えて、すべての人は希望のない悲しみに沈む。人類はみな瀕死の病気になる。（ヴァリエント）²⁵

こうして「人類の生来の肉体が知能の発達が要求する働きを満たし得ない」というならば、何らかの形で人間自身が変化しなければならないという課題が生じる。そして、このような人間の変革の必要性という課題は、『4338年』のみならず彼のユートピア小説すべてに共通して存在する「自然と人間の闘争」というテーマと密接に結びつく。すなわち、人間が自然の算術的な発想に支配され、己の物質的な利益のみ追求しているうちは、幸福な社会はありえない。『最後の自殺』や『名前のない町』は、自然の物質的な欲望の赴くまま人間が墮落していった結果、自然からいかに激しいしっぺ返しを受けるかということを徹底的に描いた物語であった。そして、人間が自然と対立せず、滅亡の道へと歩まないためには、人間が自然の卑俗なレベルから脱して、自然とは異なる人間の独自性を自覚し、それを生かした新しい人間のあり方を模索しなければならないとオドエフスキーは考えた。このようにして提起された問題の解決法が、極めて曖昧で神秘的な形でありながら提示されているのが、初期のユートピア小説『地球の生活における

²¹ スーヴィン『SFの変容』、375-377頁。

²² См. Alexander Levitsky, "V.F.Odoevskij's The year 4338: Eutopia or Distopia?" in Amy Mandelker, Roberta Reeder, eds., *The Supernatural in Slavic and Baltic Literature: Essays in Honor of Victor Terras* (Ohio: Slavic Publishers, Inc.), pp.72-82.

²³ Одоевский. 4338-й год. С.367.

²⁴ Одоевский. 4338-й год. С.350-351.

²⁵ Одоевский. 4338-й год. С.387.

二日間』である。『4338年』同様、彗星の衝突を間近に控えた未来社会を描いたこの短編では、結局彗星の衝突は、物理的な破壊をもたらすのではなく、宇宙的な規模の神秘的な人間の変容を表現する契機にすぎなかったことがわかる。

地球全体の宴がやってきた。この宴には荒々しい喜びはない。声高な叫びも聞こえないのだ！（中略）もうはるか昔に、人々は人が人となることを許さぬ困難を乗り越えていた。もう粗末な物質が精神の努力をあざ笑い、必要が必然に屈服した時代の記憶は消え失せた。はるか昔に、不完全と偏見の時代は人間の病と一緒に去り、地球は全能なる王者だけの住処となっていた。（中略）晴れがましい思いがみんなの顔に輝き、みながこの無言の雄弁を理解していた。静かに地球は太陽に近づき、まるで靈感の炎のごとく、熱のない炎熱が地上に広がった。一瞬のうちに、天は地となり、地は天となり、太陽は地球となり、地球は太陽となった……（『地球の生活における二日間』）²⁶

『4338年』は未完の作品であり、人間の変革というテーマは、物語内で明確な形で展開されることはなかった。しかし、このテーマはオドエフスキーのユートピア小説全体に通底する問題意識であった以上、仮に『4338年』が完成されていたならば、『地球の生活における二日間』以上に具体的で詳細な人間の変革のプログラムが提示されていたのかもしれないと想像しても、決して不自然なことではないだろう²⁷。

『4338年』を始めとするオドエフスキーのユートピア小説は、同時代やそれ以前のロシアの作家たちのユートピア小説と異なり、単に未来社会はどのようなものになるかを描くだけではなく、未来予測に関して極めて意識的でシステマティックな方法論を持っていた。これは、彼が資質として極めて合理主義的な発想や分析的な知性を持っていたということと関係する。そして、そのような発想や知性を生かして、科学技術の発達によって出現するであろう新奇な事物を予想するだけではなく、社会や人間のあり方そのものが未来にどのように変わってゆくのか、あるいは、どのように変わってゆくべきかというところまで考えていたところに、同時代の作家たちと一線を画するオドエフスキーの独自性があった。このような未来予測の自覚的で論理的な方法論とその射程の奥行きこそが、後のヴェルヌやウェルズの創作につながる、「本格的」と言ってもよいSF的な作品を書くことを彼に可能にさせたのである。

結びに代えて

かくして、オドエフスキーは、19世紀のロシアの作家の中でも「ロシアのSFの父」と呼ばれるのに最もふさわしい人物であったと言える。しかし、現実には、決してそう呼ばれることにはならなかった。というのも、彼には「息子たち」、すなわち彼が開拓した成果を受け継ぐ継承者たちが現れなかったからである。

『4338年』が書かれた1830年代が終わり1840年代になると、ロシア文学史上「自然派」と呼ばれる文学流派が台頭してくる。サロンの幽霊譚ではなく身近な都市の下層民に目を向けるこの流派は、そのイデオログであるベリンスキーの巨大な影響力のおかげで、たちまちのうちに1840年代のロシアの文壇を席卷する。このような状況のもとでは、もはやオドエフスキーのSF的なユートピア小説の占める場所はなく、オドエフスキー自身、それまでの自分のロマン主義的な作風を「自然派」に合わせようと試行錯誤した挙げ句、40年代の半ばに事実上文学創作の筆を折ることになる（彼自身はその

²⁶ Одоевский В.Ф. Два дни в жизни земного шара // Гуминский В.(сост.) Взгляд сквозь столетия. Русская фантастика XVIII и первой половины XIX века. М., 1977. С.215-222.

²⁷ オドエフスキーのユートピア小説における自然と人間の対立、および人間の変革の課題というテーマについては、拙稿「自然と人間の闘争 ～『自然』概念をめぐるВ.Ф.オドエフスキーのシェリング受容について～」を参照。

後 1869 年まで生き続ける)。こうしてオドエフスキーの文学遺産は、死後ますます評価を高めてゆくプーシキンやゴーゴリの創作とは対照的に、ロシア文学の歴史の中で一旦表舞台から姿を消してゆくことになるのである。

こうした状況が多少とも変わるのは、19 世紀の末から 20 世紀初頭にかけてであった。1890 年にスヴォーリンによって 3 巻の作品集が刊行されたのを皮切りに、1913 年には彼の代表作である『ロシアの夜』が再刊され、現在に至るまでオドエフスキー研究の金字塔の 1 つとなっているサクーリンの膨大な未完の研究書『ロシアの観念論の歴史から。オドエフスキー公爵。思想家。作家』が世に出される²⁸。ルネサンスというにはささやかな状況で、忘れられていた作家が一部の読書好きの人間やアカデミックな研究者の注意を引くようになったという程度のものであったと思われるが、それにもかかわらず、次の文章は、おそらくこのような「小ルネサンス」を背景に書かれたものにちがいない。

『地軸』という題でまとめられた一連の物語のなかで、私が立てた目標は、自分の同時代人や同国人たちの生活を描くということよりも(おまけに、それは、19 世紀の末の真に偉大なロシアの作家たちが上手に行っていることである)、むしろ 現実と夢、ファンタジーと現実の関係に関する永遠の問題をポエジーという手段を借りて説明しようとすることである。この謎、イギリスでは [sic] エドガー・ポー、ドイツでは、アマデウス・ホフマン、フランスでは、ボードレールやマラルメがその解決に取り組んでいるこの謎には、ロシアの作家は一人としてまだはっきりとは触れていない(誰よりも近くこの謎にアプローチしているのは、Ф.チュッチェフと В.Ф.オドエフスキーである)。²⁹

この文章を書いたのは 20 世紀初頭のデカダン派を代表する詩人とされるヴァレリー・ブリューソフで、これは彼が作品集『地軸』(1907)のチェコ語版のために書いた序文の文章である。この序文を紹介したグレチシキンによれば、『地軸』のチェコ語版は 1911-12 年に出版準備が進められ、アルヒーフに残されているブリューソフによる序文は 1911 年という日付がついていてと説明されている。作品集『地軸』には、20 世紀初頭のユートピア小説を代表する作品の 1 つである『南十字星』や、不透明なドームという人工的な世界で人類が破滅してゆく黙示録的な情景を描いた戯曲『大地』が収録され、さらにブリューソフは『機械の反乱』(未完、1908 年頃)や『最初の惑星間飛行』(未完、1920-21)のような SF 的作品を書いていることを考えると、具体的に証明することは困難であるものの、もしかしたら、オドエフスキーのユートピア小説がブリューソフのそのような SF 的な作品の創作に与えた影響があるのかもしれない。

アカデミックな研究者はともかく、20 世紀のロシアの作家たちがオドエフスキーに言及することは極めて少なく、彼らがオドエフスキーをどれだけ読んでいたのかということもはっきりしない。だが、他方では、言語学者のロマン・ヤコブソンが 1940 年代の講義をまとめた『音と意味についての六章』で短編『即興詩人』に言及しているように³⁰、オドエフスキーはロシアの知識人の教養の範囲に全く入らない作家でもなかった。それゆえ、表面には現れないものの、オドエフスキーのユートピア小説が、20 世紀のロシアの SF の創作に何らかの影響を与えたという可能性も皆無だったとは言い切れない。これについては、ロシアの SF 史の今後の研究の進展や新事実の発見に期待したい。

²⁸ Одоевский В.Ф. Повести. 3 т. «Дешевая библиотека» А.С.Суворина. СПб., 1890; Одоевский В.Ф. Русские ночи. М., 1913; Сакулин В.И. Из истории русского идеализма. Кн. В.Ф.Одоевский. Мыслитель. Писатель. Т.1. Ч.1-2. М., 1913.

²⁹ Грецишкин С.С. Брюсов о себе как прозаике // Studia Slavica Hung. Т.XXI. 1975. С.426.

³⁰ ロマン・ヤコブソン (花輪光訳)『音と意味についての六章』みすず書房、1977 年、45 頁。

付録

帝政ロシアのSFのリスト³¹

- 15世紀 「Сказание об Индийском царстве」
1547 Иван Пересветов «Сказание о Магмет-салтане»
1763 Федор Эмин «Непостоянная фортуна, или Похождения Мирамонда»
1780 Александр Радищев «Путешествие из Петербурга в Москву»
1784 Василий Левшин «Новейшее путешествие, сочиненное в городе Белёве»
1793-96 Петр Захарьин «Арфаксад. Халдейская вымышленная повесть»
1794 Павел Львов «Российская Памела, или История Марии, добродетельной поселянки»
1796 Михаил Щербатов «Путешествие в землю Офирскую Г-на С... шведского дворянина»
(1819)³² Александр Улыбышев «Сон»
1820 Вильгельм Кюхельбекер «Европейские письма»
1824 Фаддей Булгарин «Правдоподобные небылицы, или Странствования по свету в двадцать девятом веке»
1825 Фаддей Булгарин «Невероятные небылицы, или Путешествие к средоточию земли»
1828 Владимир Одоевский «Два дни в жизни земного шара»
1835 Владимир Одоевский «4338-й год»
1839 Владимир Одоевский «Город без имени»
1844 Владимир Одоевский «Последнее самоубийство»
1863 Николай Чернышевский «Что делать?»
1869-70 Михаил Салтыков-Щедрин «История одного города»
1895 Владимир Чиколев «Не был, но и не выдумка»
1901 Владимир Соловьев «Краткая повесть об Антихристе», Сергей Шарапов «Через полвека»
1902 Александр Родных «Самокатная подземная дорога между С.Петербургом и Москвой»
1904 Валерий Брюсов «Земля», Владимир Бахметьев «Завещание миллиардера»
1905 Валерий Брюсов «Республика Южного Креста»
1906 Александр Куприн «Тост»
1908 Александр Богданов «Красная звезда»
1911 Вера Крыжановская «Смерть планетъ»
1913 Александр Куприн «Жидкое солнце», Александр Богданов «Инженер Мэнни»
1916 Вера Крыжановская «Законодатели»
1917 Николай Комаров «Холодный город»

下線を引いたものはオドエフスキーの書いたユートピア小説を指す。

³¹ スーヴィン 『SFの変容』 371-419頁に挙げられているものを中心に作成した。ロシア語原題については、主として *Гаков Вл.* (ред.) *Энциклопедия фантастики. Кто есть Кто.* Минск. 1995. を参考にした。ě

³² 生前は未刊行。文学・政治サークル「緑のランプ」の1819年12月の会合で朗読されたと推定されている。